

〔魂の配慮〕

神と人にとり奉仕する^{*}

山崎和明[†]

聖句

わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください。

（ヨハネによる福音書一二章二六節、新共同訳）

^{*} 本稿は、二〇一〇年六月一七日の本学のチャペルで話した内容を原稿にしたものである。聖書箇所をガラテヤ書五章一三節からヨハネ伝一二章二六節に変更し、また内容もより分かりやすくし、『論集』用に改訂した。

[†] YAMASAKI, Kazuaki 本学社会学部教授、法学博士

説教

本日の題目「神と人にと奉仕する」は、「四国学院大学学則」規程の第一章（目的および使命）の第一条に記されている言葉です。引用しますと「四国学院大学は、旧新約聖書に示されたキリストの教えの基礎の上に立ち、学校教育法に規定するところに従い、人としての教養を身につけ、学問の真理を探究し、神と人にと奉仕する人材の育成を目的とする」とあります。また後に作成された「四国学院建学憲章」にも引き継がれ、〈私たちの基本理念〉の最初、第一項目に「神と人にと奉仕する」と記されています。

「神」と「人」とを「神と人にと」とひとまとめにしたうえで、「奉仕する」という動詞でくくっていますが、神に奉仕することと、人に奉仕することとは、同じ奉仕でも次元が異なります。この順序は逆にはなりません。それは、神の方が大切に優先せねばならないからというよりも、人間があつて神があるのではなく、神があつて人間が存在するからです。人間が神や人に奉仕できるのは、そもそも神が人に仕え奉仕して下さったからです。ちょうど、人間が神と人を愛することができるのは、すでに神が人を愛して下さったからと同じです。

同じ「奉仕する」、「仕える」でも、ギリシャ語の原典に戻りますと、おおむね三つの異なつた動詞とその派生語が用いられています。まずラトゥレウオー（*latoureuō* 礼拝する）という動詞、次にドウレウオー（*dooureuō* 僕のごとく仕える）という動詞、最後にディアコネオー（*diakonouō* もてなす）という動詞の三つです。しかし、この三つの仕えるというギリシャ語には、自ずと仕える仕え方に違いがあります。

一 ラトゥレウオー

「荒れ野の誘惑」という記事が聖書にあります。イエスは、バプテスマのヨハネから洗礼を受けて後、自分が神から派遣された神の子であることを確信します。その後、荒れ野に導かれサタンの誘惑を受けます。三つのとんでもない誘

惑でした。パンの誘惑、神を試みる誘惑、世界支配の誘惑を受けながら、イエスは、ことごとくそれらサタンの誘惑を退けました。「神である主を拝し、ただ主に仕えよ（ラトゥレウオー）」（マタイ四章一〇節、ルカ四章八節）とイエスは教えています。これがラトゥレウオーです。皆さんは、悪魔の支配下に入り、身も心も悪魔に売り渡しますか。

神を礼拝するように人を礼拝して人に仕えることはできません。もしそんなことをすれば、それは人間を神のように絶対化することであり（偶像崇拜）、同時に、仕える人間の自由を奪い、人間を偶像の奴隷にしています（隷属・隷従）。四国学院の近所には乃木大将を祀る乃木神社や、国のために命を捨てた人々の英霊（神々）を祀る護国神社があります。かつてほとんどの日本人は、天皇を現人神と称えました。いかに敬愛し尊敬すべき立派な人物であっても、はたまた崇高な権威と絶大な権能を帯びた者であっても、人間を神のごとく見なすことは間違いです。人間は神ではありません。永遠でもなく、完全無欠でもないもの、つまり不完全で時間の制約を受けたものを、人間であれ、自然（天体、山、岩、自然現象）であれ、動・植物であれ、あるいは人間の手になるものであれ、いかなる被造物をも、神の座に据えることは許されません。「神に奉仕する」とは、本当の神のみを神とし、神以外のものを神としないことを意味しています。これが「神奉仕」(Gottesdienst) です。神以外のものに、神と並べて如何なるものにも神奉仕をしてはならないのです。

二 ドウレウオー

マタイ伝やルカ伝に記された「神と富」（マタイ六章二四節、ルカ一六章一三節）という教えを見ますと、イエスは、「だれも、二人の主人に仕えることは出来ない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」と教えています。ここで「仕える」は「僕のごとく仕える」というドウレウオーが用いられています。

ここから分かるように、「神に仕える」とは唯一絶対的な主に対してであって、きわめて排他的であります。あれか

これかの一方のみであつて、あれもこれもは通用しないのです。皆さんは、この世はすべて金しだいであり、金さえあれば、すべてを動かし片付けられると考えて、金持ちになることにすべてを捧げますか。そして、金に支配され、金の奴隷のように仕えますか。

当然のことながら、垂直的な神奉仕には、「上下関係」「主従関係」「主人と奴隷の関係」が伴います。仕えられる方が主人・主であつて、仕える方が僕・従です。垂直的な神奉仕は、「服従」を旨としています。「服従」という言葉が気に入らないなら、信じて従う「信従」と表現してもよいでしょう。僕のごとく仕えるわけですから、当然、自分の自由が制限され、場合によっては自由がなくなる場合もあることを意味しています。

そうすると、自由と平等を標榜する時代の人間は、従うべき主人などいないと主張します。その場合、実は、私が私の主人であることを意味しています。私が私の主人であるとは、私の思い通りに行動し生きるということです。それは、いかにも主体的に、自主独立しているかのように見えますが、実は、自分自身が神のようになっていたのです。我欲^{エゴ}、自我を神の座につけ、我欲や自我に自分自身が支配されるのです。つまり、どんな主をも自分の頭^{かしこ}にいただかない、言い方を換えれば自分自身から解放されない、不自由な囚われの状態にあることを意味しています。パウロも、テトス三章三節で「私たち自身もかつては、無分別で、不従順で、道に迷い、種々の情欲と快樂のへとりことなり」と語っています。

では、自分自身の自我を超える（解脱）、すなわち真理や正義、善や美といった高い理想や理念に仕えるならどうでしょうか。言うまでもなく、富や金、遊びや快樂、その他、趣味に仕えるよりは、遙かに自分自身から解放されています。なるほど、自分自身を超えていますが、今度は、理念や理想が私たちを拘束しないでしょうか。自分の自由を奪われ、自由を喪失することはないでしょうか。そうはなりません。

自分を犠牲にして真理や正義、善や美といった価値に服従・信従する場合、自分の思いのままにできるという自由はないかもしれません。しかし、嘆く必要はありません。勝手気ままにできないことこそが、実は、我欲、自我からの解放につながるのです。むしろ自由になれるのです。解脱できるのです。真理や正義、善や美に従わない場合には、不正

や不義、悪や虚偽、醜惡に支配されます。それこそ悪や不正の奴隷となるのです。そこには、自由はありません。真理こそが私たちに自由してくれるのです。真理に裏打ちされた正義や善や美も、同じく私たちに自由してくれるのです。

むしろ、真理や正義、善や美の方が、自由を必要としています。強いられた真理を考えてみて下さい。それは、もはや真理ではありません。強制された善も、善ではありません。外観は同じように見えても、自由意志が存在しないところには、本当の真理も、善も、正義も、美も存在しません。たとえば囚人が刑務所内で、強いられて真実を語り、正義や善を行うとしても、自由の許されている娑婆（普段の生活）で悪や不正を行わず、嘘をつかないのとは、外見上は同じでも、全く質が異なっています。

そして、もし自由意志によるのであれば、人に対する奉仕も単なる「やらせ」か「強制労働」に過ぎません。人が「奉仕する」には自由が必要なのです。予めプログラムされたロボットが奉仕しても、それは、機械的に行っているに過ぎないのです。自由がなければ、真の奉仕はありません。真の奉仕には自由が必要です。

本来、真理や正義、善や美は、人間の隷属を求めません。自由な人間を求めています。もし、人間の自由を尊重しない真理や正義、善や美が存在するというなら、それは、まことの真理でも正義でも善でも美でもない、人間が作り上げた欺瞞的なものです。実際、北朝鮮や中国、少し前の社会主義・共産主義圏のイデオロギーがその典型です。自由主義圏と思われるところでも、押しつけによる、永遠に妥当することのない、完全無欠ではない真理や正義、善や美の事例を、今も私たちは身近に見ています。

実は、このことは宗教の場合にも当てはまります。宗教は本来、人を自由にするものです。マインドコントロールで人間の自由を奪うような宗教は、偽物です。たとえキリスト教を名のついても、人間を自由にしないならば、眉唾物（偽りもの）と言わざるを得ません。

それでは、人間を縄目から解放し、真に自由にしてくれる完全無欠で永遠に続く真理や正義、善や美はどこにあるのでしょうか。真理と正義の主である神、善と美の主である神に立ち返らねばなりません。真理であり、命であり、道で

ある生ける真の神こそが、善であり、正義であり、人間をほんとうに解放し自由にしてくれます。それゆえ、生ける真の神に仕えてこそ、私たちは神によつて解放され、真の自由を得られるのです。そして真の神に奉仕して自由を得た者は、真に人間への奉仕もできます。それは、ちょうどルターが、『キリスト者の自由』という書物において、すべてのものに対してキリスト者は、自由な主人であり、その自由な主人であるキリスト者はすべてのものに対して僕として仕える」と語っている通りです。真に神に仕える者のみが、真に人に仕えることができ、まことに人に仕える者は、まことに神にも仕えているのです。

三 デイアコネオー

では次に、人への奉仕を考えてみます。人に奉仕するとはどうすることでしょうか。聖書では、おもに「デイアコネオー（動詞）やデイアコニア（名詞）、デイアコーノス（給仕、召使い）」といった表現が用いられ、日本語では「もてなし、世話（をする）、つとめ」という表現が用いられています。ちなみに、日本語の「世話」は、〈せわしい〉、〈忙しい〉とも関わっています。

（一）マタイ二五章三四節以下（特に四〇、四五節）

皆さんもよくご存じの聖書の例から、「もてなし」が具体的にどのようなものか理解できます。キリストが再臨するとき、あたかも羊と山羊を分けるように、祝福された人たちと、呪われた人たちとを分けます。その判定基準は、「わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」かどうかです。つまり、もてなし、面倒を見、世話をしたかどうかです。

意識せずにキリスト・イエス「の兄弟であるこの最も小さい者の一人」を「もてなし」奉仕した人々は、決して人間

に奉仕しただけではなかったのです。じつに、神に対しても奉仕していたのです。だから、キリストの父なる神に祝福されたのです。私たちがあらゆるところで、キリスト・イエスに対するように奉仕するとき、まことに神と人ともに奉仕しているのです。なぜなら、キリスト・イエスは、真の神にして真の人であるからです。

(二) マルタとマリヤ（ルカ一〇章三八節以下）

さらにルカ一〇章三八節以下の「マルタとマリヤ」の話があります。おもてなしのためにいろいろと忙しく立ち働いていたマルタと、何もしないでイエスの言葉に聞き入っているマリヤの話をご存じでしょう。マルタは、自分だけにもてなしをさせていると不平を漏らし、マリヤにも手伝うように言ってくれとイエスに訴えます。しかしイエスは、「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリヤは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」と答えています。

このイエスの言葉は、人に奉仕することを大切であると教えている教会人には、痛し痒しです。教会は、マルタのように奉仕してくれる人が必要であり、マリヤのような人間ばかりでは困るからです。それゆえ、この教えを理解するのはなほだ困難です。教会では、マリヤ主義ばかりではだめだ、マルタ主義も必要、とか、マリヤのようにイエスに聞くことによって、マリヤのように働く力を得る、そしてマルタのように働いてマリヤのように聞こうといったような解釈をしています。しかし、神と人ともに奉仕することを学んだ今は、理解できます。

マルタは人への奉仕、つまり人間的にもてなして仕えたのに対して、マリヤは神奉仕をしていたのです！ マリヤは、キリスト・イエスに奉仕することによって、神に対する奉仕と、人間に対する奉仕を同時にしているのです。しかし、マルタは一見、イエスという人や人々に奉仕しているようですが、キリスト・イエスには奉仕していないため、神への奉仕と人への奉仕とが、一致せず対立してしまい、人への奉仕すらできなくなっているのです。そして挙げ句の果てには、不平不満をもらし、イエスに訴えてしまったのです。

(三) 神と父母に仕える (コルバン、マルコ七章八―一三節)

次に皆さんもよくご存じの福音書に記された「神と父母に仕える対立」の事例も、どうしてそうなるのかが分かります。話はこうです。「父母を敬え」という戒めを受けたイスラエルの民が、当時、「もし誰かが父また母に対して、へあなたに差し上げるべきものは、何でもコルバン、つまり神への供え物です」と言えば、その人はもはや父または母に対して何もしないで済むのだ」と言っていたというのです。「父母を敬い慕う」(父母敬慕)とは十戒の第五番目に当たる重要な戒めです。それにも拘わらず、神に仕えると称して、今ここに生きる父母に仕えること(戒め)をなおざりにしています。結局、父母(人)に奉仕する代わりに神に奉仕するように見えて、神に対しても奉仕できていないのです。人間的には、神への奉仕の方が、父母への奉仕より大切と考えられているゆえに、私たちはその神奉仕のどこが間違っているのかが分かり難いのです。キリスト・イエスにおいて、神に仕えることと人に仕えることが一つに和解されます。つまり、キリスト・イエスに仕えないならば、神に仕えることと人に仕えることが対立してしまい、コルバンの話のように、神に仕えているようでも神に仕えたことにならず、人に仕えているようでも人に仕えたことにならないのです。

(四) ナルドの香油 (マタイ二六章六―一三節、マルコ一四章三―九節、ヨハネ二二章一―八節、ルカ七章三六―五〇節)

その他にも、皆さんがよくご存じの「ナルドの香油」の話があります。イエスが十字架にかけられる直前、マルコ伝やマタイ伝によれば、ベタニアの重い皮膚病(ライ病)に罹ったシモンの家(ルカ伝によれば、パリサイ派のシモンの家。ヨハネ伝によれば、ラザロ、マルタとマリアの家)で食事をしている際に、一人の女(ヨハネ伝によればマリア)が、一リトラの純粋で非常に高価な香油をイエスの頭に注いだという話です。家中が香油の香りで一杯になったと記されています。

一リトラの香油とは、一リットルではなく、約三二六グラムです。この一リトラの香油を売れば、三〇〇デナリオンになると記されています(マルコ一四章五節、ヨハネ一二章五節)。デナリオンとは日当で、三〇〇デナリオンとは、

三〇〇日分の日当に相当します。それはほぼ一年分の年収に値します。日当一万円とすれば、三〇〇万円に相当します。その場に居合わせた弟子たちの何人かが、マリアの香油のことで「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか」と、マリアを非難しました。そして極めつけは、「これ売って、貧しい人々に施すことができたのに」と厳しく咎めたと記されています。

それに対してイエスは、「なぜこの人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、・・・わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできる限りのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた」と語り、「はつきり言うておく。世界中のどこでも、福音が述べ伝えられるところでは、この人のしたことを記念として語り伝えられるだろう」と、この行為を賞賛しています。

ヨハネ伝では、貧民救済を優先させる貧民の味方発言をしたのは、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダでした。貧しい人々のことを心にかけていたのではなく、ユダは盗人であつて、金入れを預かっていながら、中身をちよろまかしていたと記されています。しかし、このユダの発言は、裏切り者ユダだけの問題ではありません。私たちの問題でもあります。なぜなら、私たちも、マリアのような決断はできない、ユダと大差ない人間だからです。

この話の核心は、コルバンの例とは逆で、人への奉仕、貧民への奉仕を称して、生ける神の子への奉仕をなおざりにした点にあります。神の子への奉仕ではなく、貧民への奉仕を唱えているように見えますが、じつは貧民への奉仕にすらならないということに気づかねばなりません。キリスト・イエスへの奉仕でなければ、人間に対する奉仕も、神に対する奉仕も、共に成立し得ないのです。つまり、キリスト・イエスへの奉仕でなければ、神に対する奉仕ですら欺瞞になり、人に対する奉仕も偽善となるのです。

最後に、翻って考えてみれば、私たちが神と人々に仕えることができるのは、じつは神が世のはじめから人に仕え、私たちに奉仕してきて下さっているからです！ ちょうど、神がはじめに人を愛して下さったから、人は神と人を愛す

ることができるように。それゆえ、私たちは、神と人にとり奉仕することができるのです。

多く赦された者は、多くを愛する。赦されれば赦されるほど、神と隣人とを愛するのです。「だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」（ルカ七章四七節）。私たちも、神と人にとり愛されれば愛されるほど、仕えられれば仕えられるほど、神と人にとり奉仕せざるを得ないのです。

じつは、神と人にとり仕えるとは、キリスト・イエスに仕えるという意味です。そしてイエスは言います。今朝の聖句に記されているように「わたしに仕えようとする者（ディアコネー）は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください」（ヨハネ二章二六節）と。神であり人であるキリスト・イエスに仕えるとき、私たちは真に神と人にとり奉仕することができます。

祈り

あなたによって建てられた四国学院に、まだその果たすべき使命が残っているなら、あなたから与えられて久しい「神と人にとり奉仕する」という御言葉によって、再び四国学院を立ててください。建学の主であるキリスト・イエスの御名を通してお願いします。アーメン